この愛の物語

つかこうへい

角川文庫

この愛の物語

つかこうへい

角川文庫 6102

昭和六十年六月十日　初版発行
発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部(〇三)二三八—八四五一
営業部(〇三)二三八—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷　製本所——大谷製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
Printed in Japan

ISBN4-04-142217-5　C0193

この愛の物語

つかこうへい

角川文庫 6102

挿画　和田誠

1

夜明けから荒川の河原で「飛び降り」の練習を続けていた。その疲れで、修理工場に帰ってきても一向に能率があがらない。

来月の末の「Gメン」の撮影で、時速八〇キロで車を橋げたにぶつけ、爆発させるためには、少なくとも五メートルは前に飛び降りなくてはならない。その練習にずっとシゴかれている。

社長や村雨さんにはお手のもんだろうが、オレたちには爆薬のスイッチを入れ、すばやく車のドアを開けて飛び降りることなんて、至難の技だ。一つとりちがえれば命がない。それに練習用のセリカダブルエックスは、おんぼろでドアの開きがすこぶる悪いのだ。飛び降りて、ひじで身体をかばう。いくらプロテクターをしていても全身かすり傷だらけになり、手も作業用のペンチも持てないほどやられてしまった。

そのうえおとといからは、片輪走行で土手に乗りあげ、車をひっくり返して屋根がつぶれる瞬間、すばやく腹筋で身体をかかめる練習も追加された。もう、身体中がバラバラになりそうだ。

二、三日中にはヘルメットもなしで、安全ベルトだけで身体をかばえるようにしろと言わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れている。来月には、速度を一〇〇キロまであげ、二回転の「屋根つぶし」をやれるようにしろというのだから、たまったもんじゃない。

でも、オレたちは車好きで、命知らずのスタントマン見習いだ。ハンドルを握っていさえすればつらいことなどありはしない。

環状八号線をはさんだむかいの板金工場の、一時の作業開始を知らせるサイレンが鳴った。また、休みを終えて環八を通行する車が多くなる。

窓をあけると七草も過ぎたというのに、まだ正月のしめ飾りをつけた車が走っている。陽射しは日一日とやわらかくなっているのだろうが、身を切るような寒さはしばらく続きそうだ。

「おい、この車、社長にいじってもらわないと、明日中には納品できそうにないぞ」

カムシャフトの交換がうまくいかなくて、さっきから舌打ちばかりしていたムネユキさんが、大仏パーマの頭をメガネレンチの柄でゴリゴリひっかきながら、吐きすてた。

「二五〇キロ出るようにしてくれったって、練馬のあんちゃんが、レースに出るわけじゃあるまいし、どうするつもりなんだ。第一、日本の道路じゃ八〇キロしか出しちゃいけねえってきまってんだぞ、クソ暴走族どもが、みんなしょっぴかれればいいんだ」

自分も暴走族上りで、チューンナップとなるととたんに目を輝かすムネユキさんも、よほどイラついてるらしく、思いっきりバンパーを蹴りつけた。

「そう熱くなるなって、まっ、一服しようや」
フロントのアブソーバーを取り外していた、足回り担当のトシオも、シャーシの下から這い出してくると大きなため息をつき、ポケットからクシャクシャになったハイライトの箱をとり出し、まずそうな顔をして一本口にくわえた。朝のうちにくじいた足がはれだし、熱を持ちはじめたのか、顔が少し赤い。
「トシオ、痛むか」
「少しな、でも折ったわけじゃないからな」
「バカ、折るよりくじいた方が治りが遅いんだよ」
「湿布はしたし、一晩寝りゃ、なおるだろう」
「おい、三郎、一服しようぜ」
「ああ……」
冴えない返事をして、オレもオイルの缶を思いきり蹴りつけた。
オレだって、さっきからターボ用チャージのインタークーラーがうまい具合に接続できず、我慢も限度にきていたのだ。
「どうだ三郎、ターボは」
「どこにくっつけても車体のバランスがくずれそうで、うまくいかん」
「そうだよな、もともとターボ乗っけるようにできてねえんだ、この車は。どいつもこい

つもバカの一つ覚えみたいに、ターボ、ターボって言いやがって、日本のデコボコ道はターボなんてあったって使いものになりゃしないんだよ」

「ボンネットぶち破って、ターボでございって旗を立ててやるか」

「とにかく社長に降りてきてもらおうぜ、オレたちだけじゃどうしようもないんだから」

オレたちは恨めしそうに二階の方を見上げた。

中古屋の黒崎さんが持ってきた、この五三年式フェアレディ二八〇Z・Tのフルチューンを、明日の夕方までにあげなきゃならないのに、作業はまだ半分もすすんでいない。

「ゼロヨンで十二秒台を出せ」って条件そのものがほとんど不可能に近いのに、かんじんの社長が、朝から一度も作業場の方へ降りてこようとはしない。どうにかなるはずがない。

社長はきっと、今朝早く航空便で届いたばっかりの「スクリーン・アクション」の最新号を読みふけって、新しいスタントのアイデアを練るのに熱中しているのだ。

「三郎、おまえ二階へ行ってひきずり降ろしてこい」

「オレはイヤだよ、こんなとき話しかけたら、何言われるかわからないもんな」

「うちは修理工場でもってんだぞ。映画のスタントは持ち出しなんだ、社長にも少しは気を入れてもらわないと困るんだよ」

ムネユキさんは、ほとほと困ったというふうに頭をかかえこんでしまった。

「こういうことは言いたくないが、うちは子供が生まれたばっかりだよ。ボーナスだって

出してもらいたいんだよ」

「まあ、徹夜を覚悟してゆっくりやろうや。そのうち、社長も降りてきてくれるだろう」

唾を吐き捨てるムネユキさんと対照的に、トシオが大きなあくびを一つした。

「でも、一日、社長の顔を見ないってのも寂しい話だな」

「社長といると元気出るもんな」

「オレら、マゾじゃないのか、ハハハ」

なんだかんだ言いながら、オレたちは社長に「さ、いくぞ」と号令かけてもらいたいのだ。

まあ、いつもの黒崎さんの注文どおり、金はいくらかけてもいいってことなので、エンジンは、エンジンブロックをボウリングにして二・八一から三・五にし、ボアストロークが九〇㎜×九〇㎜のスクエア、圧縮比も一二・〇に設定して、キャブレターもＥＧＩをはずし、ソレックスの五〇φ三連装をつけ、マフラーはタコ足のトラスト七〇φシングルを使った。ターボもインタークーラーとＨＫＳ製のレース用の大型を取りつけ、フライホイールを削って軽くし、ホイールはボルクレーシング、タイヤはピレリＰ７をはかせ、フロントスポイラー、オーバーフェンダー、サイドスリット、ロールバーを装着させるなど、他のパーツもすべて最高のものに取り換えた。だけど、チューンナップで一番かんじんなのは、部品の精度ではなくてそれらの微妙なセッティング効果なのだ。そこのところは社長にやってもらわないと、オレたちの手には負えないのだ。

社長にしてみれば、練馬の暴走族相手のチューンナップ屋はあくまでカースタントの仕事をやるための手段としてやってるようなものなのだから、熱心になれないのもしようがないとは思う。

二階にかけられた「CAC "Car Action Club"」というイルミネーション入りの看板に比べ、作業場の入口に下がっているカマボコ板に毛がはえたような「立花モータース」という表札を見てもそれがよくわかる。

「とにかく降りてきてもらおうぜ。ゼロヨンで十二秒出せるようにするって約束したのは社長なんだから」

社長がいない時は、一応チーフ格のムネユキさんもこのフェアレディのチューンナップは自信がないのだろう、ヒステリックな声をあげた。

せっつかれて、オレはしぶしぶ二階に上がった。

階段を上がってすぐの右手の四畳半が、一応CACの事務所だ。

引き戸をあけると、案の定、社長はひとつしかないスチールの事務机の脇で、大きなカラーのグラフ雑誌に見入り、振り向きもしない。

机には同じような雑誌が山のように積まれ、その上に、いまにも転げおちそうな感じで電話がのっかっている。ベルがなるとオレたちが二階に駆け上がってきて取るものだから、受話器は油でベトついている。二か月分の日付を書きこんだ模造紙のスケジュール表のほかは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

壁は一面、洋画のカーアクションのスチール写真で埋まり、ぐるっと見渡すとちょうど、社長の背中にあたるところにポール・ニューマンとスティーブ・マックィーンの大きなパネル貼りのポートレートが並んでいる。

オレが戸をあけたのに気づいているのかどうか、社長はむずかしそうな顔をして、みけんにたてじわをつくっている。

「……となると、六〇〇〇回転で二三二馬力、ニトロを噴射して三〇パーセントアップで三〇〇馬力か」

大きなため息をつき、

「やっぱりアメリカはいいなあ、新品をぶつけさせてくれるもんな」

とブツブツやってる。

もうこんな状態になったら最後、目の前で電話のベルが鳴っても耳に入らず、すっかりハンドルを握っているつもりで畳の上に転がってみたり、椅子の上からバク転したりし始めるのだ。

「社長、ちょっと下に来てくれませんか、どうにもうまくいかなくって」

声はかけたものの、返事してくれる様子もなく、オレは早々にあきらめて作業場へ戻った。

ムネユキさんとトシオはオレの顔を見てすぐに察しがついたらしく、あきらめたように肩をすくめてみせ、またのろのろ仕事にかかりだした。

「嫁さんでももらえば、仕事に身を入れてくれるんじゃないのか」
「きてなんかないよ、四十のコブつきに」
「そのくせ、より好みが激しいんだから」
「女見りゃアバズレって言うんだよ。うちの女房なんか、人間じゃねえみたいに言われるんだぜ」
「とにかく、うちは女っけがないってのが問題だな」
「そうだな、気持ちが殺伐としちゃうもんな」
「おい三郎、そろそろ幼稚園に幸江ちゃん迎えにいかなくていいのか」
「もう、そんな時間か」
「しかし、いつも思うんだけど、あの子は本当に社長の子か。全然似てねえぞ」
「死んだ奥さんに似たんだろ。いつか社長のタンスの奥にしまってある奥さんの写真を偶然見ちゃったことがあるんだけど、きれいな人だったからなあ。唇の形なんて幸江ちゃんそっくりだったよ」
「しかし、あの性悪さはどうだ。『いってきます』も、『ただいま』も言わないんだもんな。オレ、最初来たとき口がきけねえんじゃないかと思ったよ」
「オレたちどころか社長にだってろくに口きいてねえぜ。なんか軽蔑したような目線おくってさ」

「しかし、女ってのは五つでもあんな目ができるんだな、こわいもんだ。うちも女の子だから気をつけなきゃな」

「じゃ、オレ、迎えに行ってくるよ。たぶん夕方には黒崎さんが様子を見に来るだろうから、それまでにはなんとかメドをつけておいてくれよ」

中古屋の黒崎さんと社長は、大学の自動車部の仲間だったのだそうだが、四十をすぎて二人ともいまだに独身でいる。

もっとも同じ独身でも、よく鍛えられた、ぜい肉ひとつないガッチリした身体つきで、かなりいい男のうちの社長と、ほとんどはげ上がってすだれのようになった頭をポマードでベッタリなでつけ、一〇〇キロ近い身体を揺すりながら集金袋下げてやってきては、ムネユキさんやトシオをこっそりトルコに誘ったりする黒崎さんとは、一緒にするわけにはいかないだろうが。

なにせうちの社長ときたら、いわゆる男っぽい顔だちで、そこいらの二枚目俳優なんかよりよっぽど男前だ。そのくせ、女の人の前に出ると、とたんにまっ赤になって言葉もしどろもどろで、ろくすっぽ話なんかできゃしないのだから、こたえられない。

ムネユキさんが冗談に、

「みんなが童貞じゃねえかって言ってますよ」

と冷やかした時でさえ、顔を赤くしてうつむいたので、みんなでゾッとしたものだ。幸江

ちゃんって子供がいるんだし、童貞ってはずはないんだから。

「CAC」というのは、社長と黒崎さんともう一人、村雨さんの三人が大学の自動車部で意気投合して、日本で初めてのカースタント専門の会社を作ろうと始めたものだ。メカキチで自動車工学を専攻していたうちの社長をリーダーに、世田谷（せたがや）の大地主の息子で、十代から外車を乗り回してた黒崎さんが資金を出し、大泉（おおいずみ）の撮影所に近いこの場所にモルタルの二階家を建てて事務所をかまえたのだ。

黒崎さんはスタントの実践に弱いことや、おやじさんの身体の調子がよくないこともあって、CACからは間もなく手をひき、中古車の販売の方を始めて、今では環八沿いに三か所も中古車センターを持つほどになった。だから今スタントクラブの方は、社長と村雨さんの二人でやっている。

この村雨さんという人もよくわからない人で、一応「立花モータース」の従業員でもあるのだが、整備の仕事にはほとんど無関心で、出勤してきたところで朝から競馬や競輪の新聞と首っぴきだし、働くとこなんてめったに見たことがない。

今日だって昼すぎにチラッと顔を出し、

「おう、そのZ、車体の中心が狂ってるぞ。なんのため両方にバックミラーがあると思ってんだ。後ろを見るだけじゃねえんだぞ」

と言っただけでフラッと出て行ってしまった。

奥さんと子供が二人いると聞いてるけど、そんな気配はまるで感じさせない。なんでも学生の時、家庭教師先の大金持のおやじさんに見こまれ、その娘と結婚したとか。そのおやじさんの会社に入ったもののすぐにやめてしまい、それと同時に家を出て、奥さんたちは実家に住んでるらしい。今、村雨さんは飲み屋の女の人のところで寝起きしてるということだけど、それもいつも同じ人ってわけじゃないようだし、とにかく質実剛健の社長とは全く反対の、少し崩れた雰囲気を持った人だ。

スタントの仕事だって、

「まったく、この年で道化師のまねやってるんだから、世話ねえよ」

なんて、くさってやってるくせに、いざとなるとカーアクションのスタントの技術は社長と互角で勝負できる腕だし、メカのことだってオレたちが困り果てて頼むと、あっという間に仕上げてしまう。

真面目(まじめ)に普通の生き方ができる人じゃないということは確かだ。夏でも紺色のジャンパーに両手をつっこんで、苦虫をかみつぶしたような顔をしている。が、時おり見せる人なつっこい笑顔は、たまらない懐しさを感じさせる。根は、きっといい人なのだ。

でも、普通じゃないということじゃ、社長も黒崎さんも同じようなもんだ。……こんなタイプの違う三人がもう二十年近くも仲がよくて、ケンカひとつせずやってきてるのはちょっと不思議な気がする。

不思議と言えば、この春黒崎さんが、高校卒業したての新入社員の女の子を連れてきて、社長にもらってくれとせまった時はおかしかった。社長も社長で真剣に考えこんでいたのだが、その娘さんがボーイフレンドと車で遊びに来た時は大変だった。

「なんだあのズベ公、男がいるじゃないか」

「いや、あれは、ただのボーイフレンドだって」

「うるせえ、高校のときから男連れて歩いてる女はアバズレにきまっているんだ」

と社長は黒崎さんを怒鳴りつけるのだ。

まだ二人でお茶も飲んだことがなく、話もなにも進んでないのに、この入れこみようだから、あきれてしまう。だいたい黒崎さんは、社員を入れる時は、社長の結婚相手としてどうか、それだけを基準にしているというからおかしい。でも、いままでまとまったためしはないという。

黒崎さんの話によれば、社長は誠実な人柄で相手からは気に入ってもらえるのだが、帰りの車の中で、やれ座ったときスカートからシュミーズが見えてただの、カマボコを食べる時歯型が見えただのと難くせをつけるというのだ。逆にひどく気に入ったかと思うと突然、

「単刀直入にききます、あなたは処女ですか」

と聞いてブチ壊してしまうというのだ。

社長は純粋な人だから気持ちはわかるのだが、いくら処女の人だって、今までまっ赤な顔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com